ロームシアター京都
ROHM Theatre Kyoto

| PRESS RELEASE |

ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）
〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13
TEL 075-771-6051（代表） FAX 075-746-3366
rohmtheatrekyoto.jp

2023（令和 5）年 4 月 7 日 報道発表資料

［本リリース発信元］ ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）

劇艶おとな団プロデュース『9 人の迷える沖縄人～after’72～』

京都公演開催！

2023 年 5 月 20 日（土）、21 日（日）

ロームシアター京都　ノースホール

［作品・チケットに関するお問合せ先］
（一社）おきなわ芸術文化の箱　担当：島袋
那覇市字銘苅 203 番地　電話：090-9688-1221　E-mail:kitakey45@gmail.com
［本リリースに関するお問合せ先］
ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）　広報担当：松本、山形、加藤
電話：075-771-6051（9：00～17：00）　FAX:075-746-3366 E-mail:press@rohmtheatrekyoto.jp

このたび上演する「9 人の迷える沖縄人」は、1972 年の沖縄本土復帰当時と現在を行き来する二重構造の物語を通し、**沖縄人の心情を浮き彫りに、今なお続く矛盾や迷い、これは「沖縄」だけの問題なのか。**と問いかけます。2015 年の初演以来、上演を重ね、2022 年「沖縄・復帰 50 年現代演劇集 in なはーと」公演は**「CoRich 舞台芸術まつり！2022」のグランプリを受賞。沖縄で生まれ、生活する劇作家・演出家・出演者によって描かれた複雑でリアルな沖縄**が、新鮮な驚きと新たな視点を与え、より多くの人に届けるべき作品であるという思いを審査員が抱いた結果ではないでしょうか。
そして 2023 年、沖縄復帰の日（5 月 15 日）の直後に、一般社団法人おきなわ芸術文化の箱にとって 7 年ぶり 2 回目の沖縄県外公演がロームシアター京都で実現します。

開催概要

■日時　2023 年 5 月 20 日（土）14 時／19 時☆アフタートークあり
21 日（日）14 時★託児サービスあり
※各回開演 30 分前より開場 ※ヒアリングループ席、車いすのサポートあり
■会場　ロームシアター京都　ノースホール
■上演時間　90 分
■チケット
全席自由　一般　3,500 円／25 歳以下 2,000 円／18 歳以下 1,000 円
当日券：一般のみ前売料金+500 円
※未就学児入場不可
取扱：
オンラインチケット 24 時間購入可 ※要事前登録（無料）（https://www.s2.e-get.jp/kyoto/pt/）
ロームシアター京都 チケットカウンター
TEL.075-746-3201（窓口・電話とも 10:00～17:00／年中無休※臨時休館日等により変更の場合あり）
京都コンサートホール チケットカウンター
TEL.075-711-3231（窓口・電話とも 10:00～17:00／第 1・3 月曜日休館 ※休日の場合は翌日）

主催：（一社）おきなわ芸術文化の箱
共催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）
協力：那覇文化芸術劇場なはーと、（一社）全国小劇場ネットワーク　後援：沖縄タイムス　琉球新報

■京都公演 WEB ページ
https://rohmtheatrekyoto.jp/event/102662/

■上演写真等のダウンロード
https://drive.google.com/drive/folders/17RwzsDE4ruoB6FuSImQ2Cov98ly_asY8?usp=share_link

出演・スタッフ

仲嶺雄作、國仲正也（鳩ス）、犬養憲子（芝居屋いぬかい）、島袋寛之（TEAM SPOT JUMBLE）
宇座仁一（宮城元流能史之会）、上門みき、伊禮門綾（劇団綾船）、与那嶺圭一（TEAM SPOT JUMBLE）
当山彰一（劇艶おとな団）

作：安和学治、国吉誠一郎　演出：当山彰一　作曲：大司義人　舞台監督：當山恵一
照明：稲嶺隆（沖縄舞台）　音響操作：安和学治 制作：島袋景子、土屋わかこ、新垣七奈

プロフィール

劇艶おとな団　Gekisyokuotonadan
2011 年、大人バンド結成ブームに刺激された演奏ができない大人達が集まり、ならば体と声を使って自分を表現しよう！と結成。主宰の当山彰一、安和朝彦、安和学治の 3 名で団員を集め「劇艶おとな団」を立ち上げ、同年 6 月にオリジナル脚本によるうちなー現代演劇「うちかび」を上演。カフェオーナー、不動産社長、カメラマン、県庁職員、会社員、郵便局員、俳優と、いろんな職種のメンバーから成る。「大人が夢を見、実現できなくちゃ、子どもと夢を語れない」と大人が本気になるとこんなに素敵な事が出来る。2015 年には制作会社として「一般社団法人おきなわ芸術文化の箱」を設立。2017 年那覇市銘苅に小劇場スペース「銘苅ベース」を開設し、演劇を通したさまざまな活動を県内各地で行っている。沖縄を舞台にした全作品オリジナル脚本で、随所にうちなーぐちを取り入れた、うちなー現代芝居。子どもからお年寄りまで親子三世代で観て楽しめる作品が特徴。「9 人の迷える沖縄人」は同劇団の代表作。今回は、他劇団や伝統芸能、沖縄芝居で活躍する役者を客演に迎え、沖縄の芸術文化の多様性も発信する。

あらすじ

1972 年沖縄の本土復帰を目前に、有識者から主婦、戦争を体験した老婆、沖縄へ移住した本土人などがひとつの部屋に集められた。
「日本がもし万が一、攻めこまれた場合、戦争はしませんって言っていられると思いますか？」
「私も胸を張って基地はいらないと言いたいです。」
「のんびりすることが美徳なら、基地も受け入れてのんびりやったらどうですか？」
語られるそれぞれの沖縄に対する想い、日本への想い、そして戦争、恒久平和への想い、いろいろな想いが交差して、渦の中に引きずり込まれていく。

上演実績

2015 年 11 月　劇艶おとな団第 9 回本公演　場所：アトリエ銘苅ベース
2016 年 11 月　劇艶おとな団第 11 回本公演　場所：JA おきなわ真和志支店ホール
　　第 9 回鳥の演劇祭にて上演　場所：鹿野往来交流館「童里夢」（鳥取）
2017 年 12 月　第 1 回小劇場ネットワーク会議にて上演　場所：アトリエ銘苅ベース
2020 年 8 月　オンライン配信公演　収録場所：アトリエ銘苅ベース
2022 年 5 月　沖縄・復帰 50 年現代演劇集 in なはーと　場所：那覇文化芸術劇場なはーと小劇場
CoRich 舞台芸術祭 2022 夏　グランプリ・演技賞受賞

劇評・感想 ――

CoRich 審査員講評より

鈴木理映子さん／演劇ライター、編集者

沖縄の過去と現在を、演劇ならではの方法でつなげる優れた作品でした。これからも、この作品が上演されるたびに、観客は、未だに「迷い」続けている現状を鮮やかに体験することになるでしょう。

「復帰」は、過ぎ去った歴史上の出来事ではないのです。上演に接してから時間が経ってもなお、なぜそうなったのか、なぜ考え続けざるをえないのか、その時感じた不条理、複雑さをリアルに思い起こします。

つくり手、演じ手、そして地域社会に生きる人々をはじめとする観客の中で「活かされる」演劇のかたちを目撃したようにも感じています。

深沢祐一さん／編集者・ライター

「復帰の日」直前に沖縄で本作と出合えたことはとても幸福な出来事であった。劇中劇の手法を用いて現代の時点から 50 年前を照射し、沖縄が直面している諸問題を浮かび上がらせていた。地元民を中心とする観客の反応を身近に感じられたことも忘れがたい。まさしく舞台芸術だからこそできることを十二分に体現した作品といえるだろう。再演時により多様な観客と反応が集まることを期待している。

大川智史さん／制作者

沖縄の本土復帰に yes か no かみたいな議論が繰り広げられるのかなと、観劇前に思っていた浅はかな自分を恥じます。この作品は、そのタイトルの通り「迷える沖縄人」に焦点を当て、沖縄の本土復帰や今なお抱え続ける問題について単純に yes/no ではなく、迷ってどうしたらいいか分からないでいる人たちの葛藤や矛盾、迷いが描かれます。その優しく寄り添うような眼差しこそが、この作品の最大の特徴であり、最も心揺さぶられたポイントかも知れません。劇中劇の構造を援用し、ドキュメンタリーでもなければ、純然たるドラマでもないという不思議な立ち位置の作品ですが、それだけに強いアクチュアリティを感じました。作中で 1972 年の復帰を目前とする沖縄と現在（2022 年）の沖縄、迷える 9 人の沖縄人の姿と劇中の場面転換の場面で轟く軍用機の音を通じて、50 年の歳月が重なり合い、彼らの迷いや葛藤は今なお変わらずあるのだと、痛切に迫ってきた瞬間が今も心に刻まれています。

河野桃子さん／ライター

いつ、誰に、何を、どう伝えるか／伝えないかという、リアルタイムの表現であることにとても意識的な上演だったと思います。上演日は沖縄復帰 50 年の日の直前ということもあり、沖縄外から訪れた人や、沖縄内でもふだん演劇を観ない人も訪れるかもしれない機会でした。劇中では、そういった方々も理解しやすい様々な工夫があり、どんな観客を想定しどうありたいのかという"公演"としての実現度が高い舞台でした。

關智子さん／演劇研究・批評・翻訳複数の予想を良い意味で裏切った作品だった。『12 人の怒れる男』を意識した『９人の迷える沖縄人（うちなーんちゅ）』というタイトルから、沖縄の本土復帰 50 周年に合わせた比較的オーソドックスな社会派ドラマではないかと類推したのだが、実際には劇中劇の構造をもって沖縄が内に抱える複雑さを提示しており、単なる社会的メッセージを運ぶだけのものではなく演劇だからできることへの意識を持っていることが高評価へと繋がった。確かに、タイミングが良すぎたのではという意見もあ

るだろう。クチコミの方に書いたが、周囲の環境も本作の理解につながるものだったため、それらの環境も含めて評価対象とするのか否かはかなり葛藤した部分である。しかし実際には、仮にそれらを切り離しても作品自体を高く評価できると結論づけた。簡単にはまとめられない問題を取り上げているため、今後何度も再演されるべき作品だろう。本土から沖縄を尋ねた人々がコンスタントに見られる作品になると良い、あるいは沖縄の古典的作品になり得るだろうと思った。

松本哲治(浦添市長)
@tetsuji_matsu

「9人の迷える沖縄人」観てきました。私の中にもこの9人全てが同時に存在している。うまく作られた作品だなぁ、と感心しました。私たちはこれからも迷い続けるわけだ、これまで同様に。いや、迷い続けていきましょうよ、皆さん。今夜18:00から最後の公演です。迷っている貴方、今すぐ「なはーと」へ❗

『9人の迷える沖縄人』さんがリツイート

石垣 綾音@こみゅとば
@commutoba

13人の迷える沖縄人、期待通りやっぱり良かった。復帰当時の沖縄に住む様々な人たちの主張、葛藤、矛盾、そしてそれを演じる現代の役者たち。舞台上のそれを観る観客のメタな視点。すべてが組み合わさって完成する作品です。

宮島真一 @MiyajimaVAC · 5月14日
素晴らしかった。

やはり、まずは知ること。
とても、大事なこと。

#9人の迷える沖縄人
#劇艶おとな団

明日（5/14）は2回公演ですよ。
行ける方は是非。

ﾁｮｺﾀﾏﾄﾞﾛﾄﾞﾛ（兼島） @chocotamadoro · 5月15日
復帰50年というテーマに演劇というメディアを通してできる、というか演劇というメディアにしかできないカタチで応答していたと思う。とてもよかった。
#9人の迷える沖縄人

2　10

このスレッドを表示

『9人の迷える沖縄人』さんがリツイート

ﾁｮｺﾀﾏﾄﾞﾛﾄﾞﾛ（兼島） @chocotamadoro · 5月15日
昨日『９人の迷える沖縄人』をなはーとにて観劇。二重構造の仕掛けも、キャラクターと役者自身（を装ったキャラクター）とのリンクも、交わされる会話も、全部が沖縄という矛盾した島の姿をはっきりとかつ複雑なままに示していて、（続）

掲載記事

2022 年 5 月 17 日

沖縄タイムス

縄タイムス　2022年（令和4年）5月17日 火曜日　芸能 16

県内３劇団「復帰」問う

復帰 okinawa 50年

葛藤や苦悩映し出す

復帰についてそれぞれの立場で意見を交わし合う様子を描いた「９人の迷える沖縄人～after'72～」＝那覇文化芸術劇場なはーと

県内で活動する3劇団が、沖縄の日本復帰をテーマにした演劇を披露する「沖縄・復帰50年 現代演劇集inなはーと」が那覇文化芸術劇場なはーとで開かれた。4、5日は劇団ピーチロックが「オキナワ・シンデレラ・ブルース」（作、演出・新井章仁）、7、8日は劇団O.Z.E「72ライダー」が（作、演出・真栄平仁）、13、14日に劇艶おとな団が「9人の迷える沖縄人～after72～」（作・安和学治、国吉誠一郎、演出・当山彰一）をそれぞれ上演。復帰50年の節目に、各劇団が復帰や平和について問題提起し、観客に疑問を投げかけた。ロビーには各劇団の紹介や県内での演劇に関する歴史年表などが展示され、上演の合間に多くの観客が見入っていた。（学芸部・木村紫乃）

9人の迷える沖縄人　劇艶おとな団

立場違い 衝突する意見

日本復帰を目前に、一つの部屋に集められた9人の男女。無作為に選ばれた、立場や背景の違う9人の男女がそれぞれの意見を交わし合う。

部屋にいるのは司会者（仲嶺雄作、有識者（國仲庄也）、復帰論者（犬養憲孝）や独立論者（島袋寛之）、沖縄に引っ越してきた本土人（当山彰一）、沖縄の伝統芸能に誇りを持つ文化人（宇座仁一）、戦争で子どもを亡くした老婆（伊禮晶綾）、そして主婦（上門みきこ）と若者（与那嶺圭一）。復帰に対するそれぞれの希望や期待が交錯し、同調したり、時には衝突したりする様子が描かれた。

意見を交わす人々が休憩に入ると、会場にはヘリコプターのごう音が鳴り響き、舞台はリラックスモードに一変。復帰を題材にした劇の稽古中という設定が明かされ、その稽古の休憩中にも、現代を生きる役者本人たちが復帰に対してさらに意見を交わしていく。実際に当山がSNSで募集した「復帰にまつわるエピソード」もスライドで紹介。当山本人のパスポートの写真やそれにまつわるエピソードなどが紹介されると、観客からは笑い声や驚きの声も上がった。

現代演劇集inなはーと

「劇中」でも「休憩中」でも、米軍基地が残ったままの復帰に対する評価や結論は出ない。教育は良くなるのか。失業率は改善するのか。平和とは何か。それぞれの職業や年齢、立場で考え方は違う。終盤に向け衝突は激しくなる。

全編を通して、揺れ動く登場人物の心情や時間経過を効果音や照明で巧みに表現。観客一人一人に、今の沖縄、そしてこれからの沖縄をどう考えるかを最後まで投げかけた。

2022 年 5 月 12 日

朝日新聞

朝日新聞　2022年（令和4年）5月12日（木）　13版　文化 22

いま舞台に描く沖縄

「島口説」＝2020年、坂内太氏撮影

復帰50年

沖縄の本土復帰50年の今年、その戦中戦後を描いた演劇の上演が相次ぐ。過去にあった時代の変わり目をどう実感し、現在と結びつけて考えるか。それぞれの作り手が方法を模索する。

「東京で13日に開幕する「島口説」の主人公は、今も面積の30％超を米軍基地が占める沖縄市の、民謡酒場の女性だ。初演は1979年、東京。沖縄文化を紹介する小劇場の企画で、那覇出身の劇作家、謝名元慶福さん（80）が、沖縄芝居の名優、故北島角子さんの一人芝居として書いた。

米国統治下の50～60年代、沖縄の状況に呼応し発表された演劇の多くは、本土の作家の作品だった。謝名元さんは「リアルな沖縄の歴史や文化を本土の人にきちっと見せたいという思いでした」。自らを「艦砲ぬ喰えぬくさー（艦砲射撃の食い残し）」と呼ぶ主人公が語る半生に、米軍の土地接収を巡る「島ぐるみ闘争」や復帰運動など、県民の戦中戦後体験を重ねた。86年まで沖縄も含む国内で300回以上公演された。

2018年、「島口説」は32年ぶりに復活した。脚色・演出の藤井ごうさん47は出身も活動拠点も東京。「僕がやっていいのかと今も思う。ただ、距離をとれることで、主人公に寄り添うけれど、寄りかからない伝え方を、考えられる面もあるはず」

大きな変更は、主人公を2人で演じる形にしたこと。舞台に彼女の体験を対象化する相手役を置くことで、観客が物語に入りやすくするためだ。「戦争経験者の話を聞くことができる僕らの世代が演劇として、どう継承していくか。大事な問題だと思います」

謝名元さんたちに続く世代の沖縄の現代演劇人が、実感と共に描くべき時代の変わり目は「復帰」だ。15年に初演された「9人の迷える沖縄人」は復帰直前、新聞社に集められた若者や主婦、本土出身者たちが、島の将来について意見を交わす様を描く。

作者の一人、安和学治さん（52）と演出の当山彰一さん（56）が、本土の演劇人に「若い世代は沖縄戦を描かないのですか」と尋ねられたことが、始まりだ。安和さんの祖母は、沖縄戦で息子4人を失った。「僕らは体験者に話を聞く機会も多い。自分が伝えきれる自信がなかった」。時代の空気をつかめる題材が、復帰だった。

日米安保や経済政策、教育振興。登場人物の意見は、当時の新聞投稿欄からとった。議論の構造が今と変わらないと気づいた。

戯曲は二重構造。実はこの意見交換会は、現代の劇団が稽古中のシーンという設定だ。復帰後も残った米軍基地を巡っては、現代の人々が考えをぶつけ合う様子を書いた。ただ、基地を巡る議論を方向付けることは避けた。安和さんは「色々な考えを聞いて、お客さんが普段は口にすることのない自分の考えに気づく機会にしたかった」。

当山さんたち主宰の「劇艶おとな団」は13、14日、この作品を那覇市で再演する。復帰50年に合わせ、他の2劇団と復帰を描いた旧作の連続上演を企画した。最近、米国統治を知らない若者に出会い、驚いたという当山さん。高校生以下の入場料は前売り千円に抑えた。「一番怖いのは『知らない』ことですから」

「沖縄」の歴史体験や直面する問題は「日本」の自画像――。そうとらえる、本土の演劇人もいる。

「『日本』が他者の受け入れに不慣れであることに気がついた」と話すのは、劇団チョコレートケーキの古川健さん43。この夏上演予定の「可愛」は、沖縄戦で米軍に追い詰められ、食糧窟に隠れた動員学徒や防衛隊員、日本兵らの心理と行動に迫る。資料を読むうち、沖縄戦での「日本」の様々な判断に「沖縄との間に無意識に引かれた線」が影響したと感じた。「作品を通じ線を見つめることで、それを無くしていく力になりたいという思いがあります」

90年代から沖縄と深く関わりながら作品を発表してきた劇作・演出家の坂手洋二さん60は「そもそも『沖縄』とひとくくりにすることが不誠実。基地に関しても本島だけ考えても、地域や時代で状況は違う」と指摘する。米企業の従業員として米軍基地内で働く地元の人々を描く、「沖縄ミルクプラントの最后」など、二項対立では語れない現実を描いてきた。

「節目という言い方で、この50年間が『過去』として忘却されてしまう可能性がある。そうなってはならないですよね」（増田愛子）

戦後生き抜く姿 新演出で復活■実感と共に伝える復帰以後

2022年6月27日

沖縄タイムス

劇艶おとな団 最優秀

舞台芸術まつり 脚本や演出評価

県内を拠点に活動する劇団、劇艶おとな団（安和朝彦団長）の演劇作品「9人の迷える沖縄人」（作・安和学治さん、国吉誠一郎さん、演出・当山彰一さん）がこのほど「CoRich舞台芸術まつり！ 2022春」でグランプリを受賞した。全国の62作品から選ばれ、再演資金として100万円が贈呈される。県内の舞台芸術団体の作品がグランプリを受賞するのは初めて。

優れた出演者らに贈られる「演技賞」は、同作品に出演した宇座仁一さんらが選ばれた。

同賞は日本各地で精力的に活動する舞台芸術団体の優れた作品を、より多くの観客と分かち合うことを目的に、演劇・ミュージカルの口コミサイト「CoRich舞台芸術！」が2007年から実施しており、14回目。3月1日から5月31日に、国内で上演された舞台芸術作品を対象にした。

5人の審査員と、観客が投稿するクチコミ情報を基に選考。「9人の迷える沖縄人」は、脚本や演出が高く評価された。

「9人の迷える沖縄人」の一場面＝5月13日、那覇文化芸術劇場なはーと

2022年7月1日

沖縄タイムス

「沖縄演劇をアピール」

演出の当山、手応え

「CoRich舞台芸術まつり！」でグランプリ

「9人の迷える沖縄人」

「CoRich舞台芸術まつり！ 2022春」（27日発表）で県内から初のグランプリを受賞した劇艶おとな団（安和朝彦団長）の演劇作品「9人の迷える沖縄人（うちなーんちゅ）」。演出を担当した当山彰一は「復帰50年の節目に、沖縄の現代演劇の活性化と県外へのアピールを目的に企画した公演。目標は達成されたと思う」と手応えを語った。出演者の宇座仁一が演技賞を獲得し「ダブル受賞はさらにうれしい」と喜んだ。

「沖縄・復帰50年 現代演劇集in なはーと」の一環で5月13、14日に那覇文化芸術劇場なはーとで上演された同作。1972年の沖縄の日本復帰を前に討論する、多様なバックグラウンドを持つ9人の男女を通して沖縄の現状や将来への問いを観客に投げかける。

「沖縄の過去と現在を、演劇ならではの方法でつなげる優れた作品」（鈴木理映子審査員）などと評価され、5人の審査員と観客が投稿するロコミ情報を基にグランプリに選出されたことに当山は「多くの方に支持された」と喜ぶ。受賞作品は2年以内の再演が求められ、沖縄の基地の問題や世界情勢に変化などがあれば、脚本のアップデートも視野に入れるという。

「9人の迷える沖縄人」で共演する当山彰一（右）と宇座仁一（提供）

同作は、劇艶おとな団と中心メンバーが重なる一般社団法人「おきなわ芸術文化の箱」が県文化振興会の支援を受けて小劇場の先進事例を調査する中で発想され、2015年に初演された経緯がある。当山は全国の演劇関係者との出会いにも感謝した。

演技賞の宇座は組踊などの実演家として実績を重ねている。当山は「今後も、沖縄の現代演劇界と伝統を担っている皆さんと共に盛り上げ、県外・国外に発信できるよう精進する」と抱負を述べた。

「9人の迷える沖縄人」は全国62作品からグランプリに選出された。演劇・ミュージカルの口コミサイト「CoRich舞台芸術！」が実施する同賞ではこれまで「柿喰う客」「渡辺源四郎商店」「木ノ下歌舞伎」などの劇団がグランプリを受賞している。

◇ ◇

「9人の迷える沖縄人」のスタッフ、キャストは次の通り。

作・安和学治、国吉誠一郎▽演出・当山彰一▽作曲・大司義人▽照明・稲嶺隆▽出演・仲嶺雄作、國仲正也、犬養憲子、島袋寛之、宇座仁一、上門みき、伊禮門綾、与那嶺圭一、当山彰一